

スペイン櫃の秘密

THE MYSTERY OF THE SPANISH CHEST

1991年作品

製作:ブライアン・イーストマン

監督:アンドリュー・グリーブ

脚色:アンソニー・ホロウィッツ

日本語版プロデューサー:里口 千

日本語版演出:山田 悦司

日本語版翻訳:宇津木 道子

出演:

エルキュール・ポワロ … デビッド・スーシェ/熊倉 一雄

ヘイスティングス大尉 … ヒュー・フレイザー/富山 敬、安原 義人

ジャップ主任警部 … フィリップ・ジャクソン/坂口 芳貞

※ ※ ※

カーチス大佐 … ジョン・マケナリー/中村 正

マーゲリート・クレイトン … キャロライン・ラングリッシュ/萩尾 みどり

リッチ少佐 … ピップ・トレンス/中田 浩二

エドワード・クレイトン … マルコム・シンクレア/田中 信夫

レディー・チャタートン … アントニア・ペンバートン/公郷 敬子

バーゴイン … ピーター・コブリー/松村 彦次郎



©Carnival Films & Theatre Ltd 1990

レディー・チャタートンから、友人のクレイトン夫人が嫉妬にかられた夫に命を狙われていると相談されたポワロは、彼女と共にクレイトン氏が妻との仲を疑っているというリッチ少佐のパーティへ赴いた。ポワロがリッチ少佐と客人たちの間に異様な緊張感と不審なものを感じていた頃、居間にあるスペイン櫃からは血が滴り落ちていた。翌日、ジャップ警部が事情聴取にやってくる。櫃からクレイトン氏の遺体が発見されたのだった…。

◆ポワロ危機一髪

“決闘”をモチーフにした本話では、時代を偲ばせるセピア調に彩られたプロローグ、及び、謎解きに引き続いて真犯人に引導を渡す解決編にて、剣による白熱の闘いが描かれています。特に後者は、剣先を突きつけられ怯えるポワロが一興。もしかするとここで一転、名探偵の素晴らしい剣さばきによる反撃が見られるのではという期待を抱かせますが、残念ながらやはりそういうことにはなりません。とは云え、肉体を使ったアクションをも堪能できる、本シリーズにおいては特徴的な一編です。

ついでながら、序盤では“オペラはもうウンザリ”といった態度で俗っぽさを強調されるヘイスティングスが、中盤では短いシーンながら、クレイトン夫人の危機を救おうと敏に寡黙に活躍する、その頼もしい様にもご一目下さい。

◆時代遅れの愚行

西洋の“決闘”と云えば、相手に手袋を投げつけて申し込み、剣あるいは銃を使って、それぞれの名誉を賭けた紳士が正々堂々と立ち合う。大雑把にそんなイメージを抱きがちですが、劇中でクレイトン夫人を巡る決闘の話聞いたヘイスティングスが、「イギリスで!?’と驚いている様に、少なくとも1930年代のイギリスでは、そうした行為はもはや過去の出来事であったようです。もともと決闘は裁判で決着がつかそうもない際に行われた、つまり裁判制度の一種であったと云います。しかしイギリスでは、私闘の決闘は早くから禁じられていた上、1852年には法律によって決闘自体が禁止されたそうです。

◆個性派の出演者たち

頑で眼光鋭いリッチ少佐役のピップ・トレンスは、本シリーズ後盤の『満潮に乗って』にて、主要人物の一人ジェレミー役として再登板します。また、複数の男性を惑わせるクレイトン夫人役のキャロライン・ラングリッシュは、本シリーズのスタート前にポワロ役として最も評価の高かったピーター・ユスティノフがポワロを演じた米TV作品『死者のあやまち』(1986)にも出演済みです。

老練な傲慢さが印象的なカーチス大佐に扮するジョン・マケナリーは、“決闘”を軸に描いたリドリー・スコット監督黎明期の傑作映画『デュエリスト/決闘者』(1977)に出演しています。酷な殺され方をした衰れたクレイトン氏に扮するマルコム・シンクレアは、ダニエル・クレイグが007役初登板となった『カジノ・ロワイヤル』(2006)で、ボンドに非情に抹殺されるドライデン役も印象的な俳優です。